



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

## アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.253

2024.10.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

第42回

心に残る  
先学の人生記録

—読書日記から—

大村 裕

## 藤岡謙二郎『浜田青陵とその時代』

(学生社 1979年)

本書は本邦考古学の基盤を構築した偉大な考古学者・浜田耕作(青陵)(1881~1938)の伝記である。浜田の生涯を中心に描かれているが、標題にもあるように浜田を取りまく人びとの動向や、彼の業績の要約などが紙面の多くを占め、その人となりを知る上では少し物足りない。それで、①『考古学論叢』2巻8輯(「濱田博士追悼号」)、②『日本考古学選集』の「集報15」、③『考古学京都学派』で注目される数々のエピソードを交えて「浜田耕作」の人物像を描いてみたい。なお上記①~③関係の証言については、タイトルをいちいち記載する紙幅がないので、証言者の名前と掲載文献番号のみ記載することとする。

浜田耕作は明治14(1881)年大阪府南河内村にて父・源十郎・母むめ子の長男として出生。浜田家は代々岸和田藩士であった。父は警察官であったが、行く先々で上司と衝突する一方、下役には受けがよかったという。浜田の人格を彷彿とさせる話である。

明治27(1894)年、大阪府立第一中学校に入学。ところが五年時に体育教師と喧嘩して放校処分となる。息子が学校を早退して帰ってくると、母親は「病気になったのか」と思って心配するが、それが放校のためと知るとホッとしたという(浜田敦(②))。恐らく母親は、息子が破廉恥な事件を起こして放校処分となったとは全く思っていなかったからであろう。浜田の倫理観を知るエピソードがある。次男の敦が中学時代にタバコを吸って停学をくらった折、浜田が学校に呼び出され、校長から厳重監督を促されると、「家ではタバコを許しています」と返事したという。ただし帰宅後、敦には「もしカンニングのような破廉恥罪で処分されたのなら決して許さぬ」と釘を刺している(浜田敦(②))。卑怯な行ないでなければ些事には目をつむむということであろう。話を戻すと、放校処分をくらった後は早稲田中学第五学年に編入。以後、第三高等学校→東京帝国大学文科大学史学科(西洋史専攻)→東京帝国大学大学院(美術史専攻)とエリートコースを歩むことになる。

大学院在学中には早稲田中学校歴史科講師となる(1905年)。ここでは、生徒たちに深い感銘を与えたようだ。生徒たちには甚だ残念なことであるが、浜田は、明治42(1909)年に早くも京都帝国大学文科大学に招聘されてしまう。山根徳太郎の伝聞(①)によると、浜田が新橋駅から京都に向う折、早稲田中学の生徒らが大学して駅頭から見送ったという。

大正2(1913)年、助教授となり欧州留学。英国の「ペトリー」、セイブ両教授の指導を受けるほか、欧州各地を巡る。この体験が、広い視野から考古学を研究する基盤となったのであろう。大正5(1916)年に帰国。この年、京都帝国大学文科大学に考古学講座が設置され、その担任となる。翌年、教授に昇任。在職中は、国内および東アジア各地の遺跡を組織的に発掘している。発掘した遺跡は必ず模範的な調査報告を出版しているが、それは、「遺跡の破壊は罪悪であり、その罪から免れるには、発掘経過を精確に記録して、それを出来るだけ早く公表し、ほかの

研究者が資料として自由に利用できるようにすべき責任がある。」との信念があったからである。その他、不朽の名著『通論考古学』や、オスカル・モンテリウスの「DIE METHODE」の翻訳書(『考古学研究法』)を著すなど、西欧の考古学の理論と実際をわが国に移植することに努力している。

浜田耕作は、京都帝国大学考古学講座の「創業者」として、人格的統率力と人間的魅力を持ち、幅広い教養と政治力を持っていた(穴沢味光(③))。それが多くの教え子・後進を心酔させたのであろう。ただし、授業には熱意がなかったという証言がある(山根徳太郎・澄田正一(①)、三森定男・角田文衛(③)等)。その理由について浜田は、「教えることは全くだらぬ。ですから私のノートは、昔つくったままです。(中略)研究に力を入れた方が学界を、つまり社会を益することが多い」、「私は授業なんか止して、こんなお茶の会を毎日開いて愉快地に談話したり、互いに意見を述べたりした方が、人格的に、学問的にもずっといいと思いがね」と言ったという(角田(③))。この、「お茶の会」等における浜田の薫育に、学生らは大きな感化を受けたのであろう。特に海外の考古学に関する該博な知識は、水野清一・角田文衛・澄田正一等の今後進む道を決めたと思われる。また浜田は、自ら長期間にわたって発掘の陣頭指揮をとったり、精密な遺物の実測をしたりすることを好まなかった。このため梅原末治・末永雅雄・小林行雄等を外部から雇ったのであるが、彼らは浜田からの確かな指針を受けて仕事に当たった結果、精密な実測法に磨きをかけ、大規模発掘のノウハウを体得したのであった。この方向性が、1960年代以降始まる大規模発掘の要請にマッチし、日本考古学の主流の一角を占めることになるのである。

浜田は少しも権威主義的なところがなく、リベラリストで、権力者におもねることもなく目下の人々には優しくかった。総長時代、「木戸文部大臣」が京都帝大に来訪したとき、迎えには書記官を出して、自分は病院で解剖された人たちの慰霊祭に出席している(天野定祐(①))。恩師にも「君」づけにして「先生」の称をあえて使わなかった。一方、目下の者たちには思いやりのある態度を見せている。在野考古学者の森本六爾夫妻が鎌倉で貧窮と病魔に苦しんでいたとき、これを見舞った浜田は、森本夫妻に同情して、京都に帰る汽車賃をすべて見舞金として置いてきてしまったという(八幡一郎(①))。こうした「不世出の大人格者」(江上波夫(①))の浜田が「京都帝大総長」に周囲から押し上げられるのは必然であった。しかし折悪しく、就任前後、事務方や医学部で不正事件が勃発する。更に親友・某氏の不祥事が発覚したことによって浜田は決定的にうちめされ(三宅宗悦(①))、死期を早めることになる。彼の学問に独創性はやや乏しかったけれど、類まれな人格と指導力で数多くの俊秀を集め、育てて日本の考古学のレベルを引き上げたのであった。「日本考古学の父」と言われる所以である。

\*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第42回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第245回)	山内良祐 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第17回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚 「瓦礫」を追った人びと	太田雅晃 …4

## 考古学の履歴書

## 考古学とともに歩む(第17回)

山本 暉久

## 17. 神奈川県職員としての考古学 その1

1973(昭和48)年4月、神奈川県庁職員として採用され、教育庁社会教育部文化財保護課に配属された。公共事業に伴う埋蔵文化財の調査に携わるのが主な職務であった。特別採用試験による埋蔵文化財担当の専門職ではあったが、待遇は他の県庁職員と同様の上級公務員(一般事務職)であった。その後急増する開発事業に対応するために、県職員として採用し続けることは、職員定数の関係から難しくなり、県立埋文センター設立から県主導の財団法人化へと移行していくこととなる。こうして、2002(平成14)年3月までの29年間という長い間、神奈川県で埋蔵文化財行政に携わることとなったのである。

考古学という専門性を生かした職務ではあったが、研究職ではなく、考古学的知識は要求されるものの、行政側が必要とするのは、開発事業(者)に対する調整能力の発揮であり、逆にそれが仕事上のストレスや悩みとなることが多い。開発事業に当たっては、対象となる遺跡(埋蔵文化財)をそのまま保存・保護することは難しく、多くは「記録保存」という名の下に調査はするものの、結局は、遺跡を破壊してしまうことに手を貸すことになる矛盾を抱え続けることとなる。それと、埋蔵文化財行政の拠り所である「文化財保護法」では、開発行為に対する「記録保存」調査の費用負担を原因者たる事業者に求めるという、「原因者負担」制度(制度というか、法に明記されない、お願い=協力を求める)という根本的な問題を抱え続けて、今日まで続いており、それが埋蔵文化財行政担当者の重荷ともなっているのである。

そのような問題点を抱えてはいたが、神奈川県での遺跡調査を通じて、多くの貴重な経験をする事ができた。自己の専門とする縄文時代に限らず、あらゆる時代の遺跡に携わり、そこで「未知との遭遇」する感動を覚えることとなる。それが、考古学の「醍醐味」なのであろう。ここでは、研究を含めて発掘調査など、神奈川県での29年間にわたって経験してきたさまざまなことについて何回かに分けて振り返っていくこととしたい。

ところで、今振り返ってみると不思議な気もするが、就職当時は、遺跡の調査は、泊まり込みが当たり前であった。それは、大学での発掘調査は泊まり込みの合宿が当たり前だったことによるのかもしれない。だから県内の調査は泊まり込みが原則であった。旅館や工事事務所のプレハブ宿舍(いわゆる「飯場」)に



▲『重要文化財 一かながわ考古展-』  
神奈川県立歴史博物館 2003より転載

寝泊まりするのが当たり前であった。それが数年後には改められて、遠隔地で通うことが困難な場合を除いて原則通いとなった。

就職して、はじめて長期にわたる調査となったのは、海老名市上浜田遺跡であった。浜田土地区画整理事業に伴う調査で、開発主

体・施行者であった相模鉄道株式会社に関わる調査で、珍しく民間施行にかかわる調査であった。担当者は國平健三(神奈川県立歴史博物館)であった。1973年7月に始まった本格調査では、中世の居館址(県指定史跡として保存)や古代の大規模な集落址が検出されていた。長期間にわたる発掘調査は、大学時代には経験していなかったから、体力的には負担のかかるものであった。この上浜田遺跡を調査している9月半ば、一旦現場を離れ、本庁に戻り、同月29日、かねてから付き合っていた彼女と結婚した。大学の恩師、先輩、職場の上司、同僚たちに囲まれて、早稲田大学の大隈会館で、人前結婚式を挙げる事ができた。

11月から再び上浜田遺跡に戻り、翌年4月初めまで調査に携わった。この遺跡では、古代の多数の竪穴住居址や掘立柱建物址の調査を経験する事ができた。とくに古代の竪穴住居址の調査は、それまであまり経験がなかったので大変良い勉強となった。職員がそれぞれ竪穴住居址に張り付いて、発掘作業員に指示を出しながら調査するもので、プランを出し終わったあと、トランシットで1mの方眼を組み、水糸を張り、画板を抱えながら、コンバックスと下げ振り(錘球)を用いて平面図を一人で作図するものであった。また、竪穴住居址の竈の調査も大変勉強になった。

上浜田遺跡の調査のなかで、自分にとって忘れられない発見があった。古代の集落址の調査終了後、丘陵上に設定した縄文時代面の調査で、3基の土坑内から対をなす玦状耳飾が検出されたのである(写真参照)。土坑が確認された段階では、なんの期待も抱いていなかったのであるが、土坑を半截して調査する過程で底面近くから滑石製の玦状耳飾が出土し、その後全截したところ、もう一つの玦状耳飾が出土したのである。さらに隣接する土坑を調査したところ、ここからも対になった玦状耳飾が出土した。これにはさすがに驚いて、写真撮影するため、周囲を鋤簾(ジョレン)がけしていたところ、鋤簾の刃先に引っかけて、さらに対となった玦状耳飾が検出された。この玦状耳飾は大変残りの良いものであったが、残念ながら、そのうちの一個は、鋤簾の刃先で破損して真っ二つに折れてしまい、しかも鋤簾の刃先によるガジリ痕を残すものとなってしまった。いまは県の重要文化財に指定されているが、このガジリ痕は痛恨の極みで、今見ても心が痛む。対となった玦状耳飾りを出土した3基の土坑は、明らかに玦状耳飾を装着して遺体が葬られた土坑墓と思われる。時期は内部から出土した土器片からは判断が難しいが、周辺から出土した土器からすると、おそらくは、茅山上層式以降の早期末葉に位置づけられるものであろう。

## 略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月~1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月~2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英式記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月~2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

## リレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 245

## 今朝平遺跡 ～愛知県豊田市

山内 良祐

今回私が紹介する遺跡は、愛知県豊田市足助町に所在する今朝平遺跡です。豊田市は愛知県の中央北部に位置する、県内最大の面積の市町村です。一級河川矢作川が南北に貫流し、北東部は山間地域、南西部には丘陵、沖積平野が広がる変化に富んだ地形となっています。また、豊田市にはトヨタ自動車の本社もあり、「クルマのまち・豊田」としても知られています。2005(平成17)年には今朝平遺跡のある旧足助町を含む1市6町村が合併し現在の市域となりました。足助地区は豊田市の中でも山地に位置し、秋には紅葉の名所である「香嵐渓」が賑わい、尾張、三河そして伊那を結ぶ伊那街道(中馬街道)沿いの商屋町の姿を伝える「豊田市足助伝統的建造物群保存地区」(重要伝統的建造物群保存地区に選定)も所在します。今朝平遺跡はこの地を流れる足助川により形成された谷底平野に立地し、縄文時代後期前葉～中葉を主体とする遺跡です。

今朝平遺跡は愛知県足助保健所の建設予定地となったことがきっかけで1978(昭和53)年から1979(昭和54)年に発掘調査がされ、その後概報は刊行されましたが、本報告は刊行されてきませんでした。そこで、豊田市教育委員会は2017(平成29)年度から2018(平成30)年度にかけて出土資料の整理と報告書作成を豊田市遺跡調査会に委託し、2019(平成31)年3月に正式な報告書が刊行されました。私はこの整理作業に学生時代に関わらせていただき、遺物に触れ、資料の見方、取り扱いそして考古学の研究について学ぶ機会をいただきました。

さて、今朝平遺跡ですが、遺構としては縄文時代後期前葉の土器を底面に敷いた石囲炉を持つ竪穴建物が確認されています。これは概報ではもともと配石遺構とされていたものを、本報告では単なる配石遺構ではなく竪穴建物の「周堤礫」とも評価し、その中央に位置する石囲炉と一体で竪穴建物と判断されたものです。また、遺物としては有名なものとして土偶が挙げられます。顔の表現がなく、全体的にふくよかなフォルムをしているこの土偶は「今朝平タイプ」と呼ばれ、東海地方の縄文時代後期を代表する土偶とされています。また、その他の特筆すべき点として、縄文土器の出土量が挙げられます。調査面積は445.8㎡とそこまで大規模のものではないにもかかわらず、点数では10万点、重量では800kgを超える縄文土器が出土しています。1㎡あたりに換算すると232.38点/㎡、1.93kg/㎡となり、周辺の縄文時代の遺跡と比べても圧倒的な密度で縄文土器が出土しました。包含層からの出土が多い状況ですが、東海地方の八王子式とその前後に属し、関東の堀之内2式から加曾利B3式、関西では北白川上層式や一乗谷K式などと並行する時期の良好な資料群で

あると言えます。石器についても4,000点を超える量が出土しており、利器類の石材としては遺跡周辺では採取できない下呂石、黒曜石(諏訪産)、サヌカイトなどが多く用いられており、これらいわゆる「搬入石材」の状況から、周辺地域と交流の様子も垣間見ることができます。

このような今朝平遺跡ですが、先に記載したとおり県の保健所の建設予定地となったことが調査のきっかけでした。しかし、調査が進むにつれ配石遺構や各種遺物の出土状況から遺跡を保存していこうという方向に舵が切られるようになっていきました。1979(昭和54)年2月には名古屋大学の澄田正一、大参義一両名が遺跡の現地指導に訪れ、遺跡の重要性を確認し保存についての様々な指摘、指導を受け、その後、愛知県教育委員会との話し合いも行われました。年度が替わり、4月には調査担当者と町教育委員会職員が文化庁へ陳情に訪問し、保存活用に関して指導を受けております。このような動きの結果、今朝平遺跡は現地保存されることが決定され、1980(昭和55)年3月28日に「愛知県の縄文時代後期を代表する遺跡」として愛知県指定史跡に指定されました。また、出土遺物については同じ年の3月25日に足助町指定文化財(現在は豊田市指定文化財)に指定されております。その後、遺跡保存や活用についても議論が重ねられ、1981(昭和56)年度に遺跡の中心部に説明板などを設置し、遺跡公園として整備されました。このように今朝平遺跡は、地域の重要な文化財として地元住民から行政機関にまで理解を得て、史跡指定そして整備までを行うことができ、文化財保護の一つの好例であるといえるのではないのでしょうか。特に、地元住民の興味関心はひとしおであり、新足助町成立30周年記念の際には足助川に架かる足助大橋の東側に今朝平遺跡から出土した土偶をモデルとした石像が建立され、今でも足助地区に訪れる人たちを出迎えています。

さて、現在私は愛知県職員として働いており、縁あって整理作業に携わった今朝平遺跡を今度は県指定史跡として「保護」していく立場となりました。今後は今朝平遺跡そのものの保護はもちろん、今回紹介したようなこの遺跡が保護されることとなった経緯や地元の思いなども含めて後世に伝えられていくよう取り組んでいきたい、という私の決意を記して拙文を締めさせていただきます。皆様も機会があればぜひ今朝平土偶に会いに来てください。

#### 参考文献:

長田友也編、2019、「今朝平遺跡」豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第79集、豊田市教育委員会：豊田市。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは林順さんです。

## 考古学者の書棚

## 「瓦礫」を追った人びと —黎明期考古学界の先達たち—

杉山博久 著／雄山閣(2022)

太田 雅晃

## はじめに

戦後の小田原考古学界を牽引した杉山博久先生が、今年の4月に逝去された。享年87歳。小田原城内高校で教鞭をとる傍ら、市文化財審議委員等の立場から多くの遺跡調査に携わり、県央—県西部の基本層序確立にも大きく寄与した偉大な先達である。筆者は小田原地域の遺跡調査を担当する機会が多く、先生には何度かご来跡いただいて現地で指導を受けた。柔らかい物腰とは裏腹に事実関係に対しては厳しいご指摘があり、その都度身のしまる思いをした記憶がある。

今回紹介する書籍は、そんな杉山先生の絶筆となった『「瓦礫」を追った人びと—黎明期考古学界の先達たち—』である。

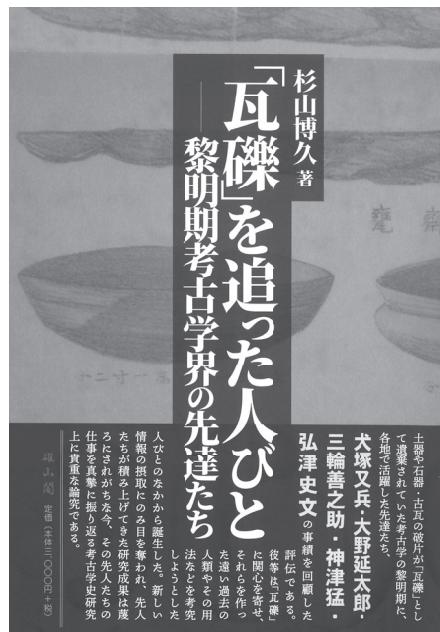
## 本書の内容

地域史研究と並ぶ先生(以下、著者)のライフワークである学史研究の成果がまとめられた本書は、1999年出版の揺籃期考古学界人物伝である『魔道に魅入られた男たち』(杉山1999)の続編ともいえる内容で、考古学界の黎明期—考古遺物が「瓦礫」として道端に打ち捨てられていた時代—に躍動した5名の研究者に光が当てられている。

第1篇は福島県を主戦場に23篇もの著述を東京人類学会雑誌に残した犬塚又兵。犬塚の事績で特筆されるものは、1894年(明治27)有坂韶蔵・坪井正五郎らが東大構内で弥生式土器を発見し話題となった直後に岩代(※現在の福島県西部)で弥生式土器を発見し、これを契機として弥生式土器と縄文式土器とが峻別されるようになったことである(※犬塚自身がこれについて書き残したものはなく、八木英三郎・鳥居龍蔵らが自らの著作の中で回顧するに留まっている)。この岩代の遺跡の候補地について、著者は遺跡地名表を丹念に精査し、梅宮茂が「明治・大正期の考古学史」『福島考古』20(梅宮1979)において指摘した郡山市福良沢遺跡ではなく、伊東信夫らが1969年に調査した同市福楽沢遺跡ではないかと推察している。

第2篇は東大人類学教室の画工から研究者へと変貌を遂げた大野延太郎。数多の編著作と調査旅行で知られる黎明期考古学界の巨人であるが、著者は150篇を超える大野の作品を精読し、その動向をトレースする。1908年(明治41)、人類学教室が調査を主宰しながら未公表に終わった武蔵国橋樹郡旭村(※現在の横浜市)駒岡横穴墓。雑誌『武蔵野』、遺跡保存会の石板画図、果ては江見水蔭の小説的なルポにまでその残滓を追いかけた著者は、記されない歴史に穴居論争の影と人類学会の坪井への忖度をみる。

第3篇は板碑と古瓦の収集・分析に尽力し、「武蔵野の古瓦」『武蔵野』11-1(1928年/昭和3)を執筆して武蔵国分寺の瓦と東金子窯址群出土の瓦との関係性に先鞭をつけた三輪善之助。章末には三輪の残した古瓦とその出土地に関する論考がリスト化され、その事績が散逸せぬようまとめられている。



第4篇は信濃考古学会の主催者であった神津猛。長野県における弥生時代の竪穴住居址や須恵器窯の発掘を先駆け、「信濃考古学会」を立ち上げて『信濃考古学会誌』(1929～1932年/昭和4～7)を発刊するなど、県内の考古学研究を推進する姿に著者は強い共感を抱く。

第5篇は山口県で「考古学の生字引」と評され、『防長考古学資料写真集』(1926～1927年/大正15～昭和2)や『防長石器図集』(1928年/昭和3)、『防長漢式鏡の研究』(1928年/昭和3)など数々の考古資料集を世に送り出した弘津史文。弘津の研究者としての姿勢は徹底した資料提供にあり、石器・鏡・古鐘・経筒・馬具・甲冑・古文書などあらゆる文物を網羅・収録して資料化している。著者はこの献身的姿勢が考古学研究の発展に寄与したと高く評価する一方、地域研究者として独自に考究する姿も見たかったとの残心の念を記している。

以上、5篇を概括したが、その底流には「地域」「実学」の精神が息づいているのを感じられよう。

## おわりに

本書の冒頭に先生の思いが記されている。「本書及び私の一連の著述が、考古学を学ぶ若い人びとにとって、学史を回顧し、先人たちの努力に敬意を払う機縁となり、また読書人士には、今日のすばらしい日本考古学の発展の蔭には、こうしたたくさんの無名の人びとの努力があったのだ、ということを知って頂く契機ともなることが出来れば私の大きな喜びである。」(P4.16-8)

細分化とデジタル化で近視眼に成り果てた我々に、先生の柔らかな叱責が耳に痛い。

## アルカ通信 No.253

発行日 2024年10月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : http://www.aruka.co.jp